心身科学 第4巻第1号（49–55）（2011）

承認欲求，制御焦点と親の社会的勢力の関係
――仮説の提示――

三ツ村　美沙子*1)　　高　木　浩　人*2)

このレビューでわれわれは，賞賛獲得欲求，拒否回避欲求，制御焦点と親の社会的勢力に関わる5つの仮説を提示した．5つの仮説とは以下の通りである．仮説1：賞賛獲得欲求と促進焦点は正の関連を示す，仮説2：拒否回避欲求と抑制焦点は正の関連を示す，仮説3：両親に対する社会的勢力認知は制御焦点と関わる，仮説4：父親に対する社会的勢力認知は促進焦点と関わる，仮説5：母親に対する社会的勢力認知は抑制焦点と関わる．今後の実証研究の含意について議論された．

キーワード：賞賛獲得欲求，拒否回避欲求，促進焦点，抑制焦点，社会的勢力

本論文の目的は，承認欲求（approval needs）と制御焦点（regulatory focus）の関連について論じ，その先行要因として親の社会的勢力（social power）を位置づけることで，これら3つの概念についての仮説を提示することである．

制御焦点理論

人には，ポジティブなものを求める傾向とネガティブなものを避ける傾向が存在すると言われる．「快（pleasure）を求めて苦（pain）を避ける」という快楽原理（hedonic principle）などはその代表的なものであろう．これは，心理学のあらゆる分野に通用する基本的な仮定である（Higgins, 1997）．人のさまざまな行動が，この原理に基づいていることは論を俟たない．

この快楽原理に対して，快を求める際にも，苦を避ける際にも，異なる方略があるとの観点から制御焦点理論（regulatory focus theory）を提唱したのがHiggins（1997）である．Higgins（1997）は，制御焦点として促進焦点（promotion focus），抑制焦点（prevention focus）を区別している．そして，快を求める場合にも苦を避ける場合にもそれぞれの焦点が機能しうるのであり，焦点によって方略が異なるとしている．快には望ましい結果の存在（gain）と望ましくない結果の不在（non-loss）があり，苦には望ましい結果の不在（non-gain）と望ましくない結果の存在（loss）があるとされる．そして促進焦点とは，望ましい結果の存在（gain）―不在（non-gain）に敏感なことであり，抑制焦点とは，望ましくない結果の不在（non-loss）―存在（loss）に敏感なことである．促進焦点は望ましい結果の存在（gain）の最大化，望ましい結果の不在（non-gain）の最小化と関わり，抑制焦点は望ましくない結果の不在（non-loss）の最大化，望ましくない結果の存在（loss）の最小化と関わる．

制御焦点は，プライミングの手続きなどによって独立変数として実験的に操作される場合と（e.g.Shah & Higgins, 1997; Shah, Higgins & Friedman, 1998; Lockwood, Jordan & Kunda, 2002），個人特性として扱われる場合がある（e. g. Shah & Higgins, 1997; Lockwood, Jordan & Kunda, 2002）．実験的な操作としては，たとえばShah, Higgins & Friedman（1998）がある．Shahら（1998）は，アナグラムを用いた実験で「90％以上の語を見つけたらプラス1ドルもらえる（4ドルが5ドルになる）」という教示を与える場合（＝促進焦点）と，「10％以上ミスしなければ，1ドルマイナスを避けることができる（5ドル確保できる）」という教示を与える場合（＝抑制焦点）とで，2つの焦点を操作している．つまり前者ではプラスの有無に焦点づけられ，後者ではマイナスの有無に焦点づけられることに

＊1）愛知学院大学大学院心身科学研究科心理学専攻博士前期課程
＊2）愛知学院大学心身科学部心理学科
（連絡先）〒470–0195　愛知県日進市岩崎町阿良池12　E-mail: misako.mitsumura@gmail.com

なるわけである．特性としての促進焦点—抑制焦点を測定する際には，質問紙を用いた手法が工夫されている（e. g. Shah & Higgins, 1997; Lockwood et al. 2002）．またわが国では，尾崎・唐沢（2011）が Lockwood et al. (2002）の邦訳を行っている．

制御焦点と承認欲求

さてわれわれが，このような制御焦点と密接な関わりをもつのではないかと考えるものの一つに，承認欲求（approval needs）がある．文字通り他者から承認されたいという欲求のことであるが，菅原（1986）はこの承認欲求として，「他者から賞賛され，好かれたい欲求」である賞賛獲得欲求と,「他者から嘲笑されたり，拒否されたくない欲求」である拒否回避欲求を想定している．われわれは，Higgins（1997）の言う制御焦点と，この 2 つの承認欲求との間に密接な共通性が存在すると考える．

いずれも快を求め苦を避けようとする欲求であるが，そこには異なる方略を想定しうる．承認欲求において快は賞賛の存在（gain），拒否の不在（non-loss）であり, 苦は賞賛の不在（non-gain), 拒否の存在（loss）である．したがって，賞賛の有無に注意を向ける賞賛獲得欲求は促進焦点と，拒否の有無に注意を向ける拒否回避欲求は抑制焦点とそれぞれ対応する．そこで，賞賛獲得欲求の強い者は，個人特性としての促進焦点の傾向が強く，拒否回避欲求の強い者は，個人特性としての抑制焦点の傾向が強いとの予測が成り立つ．以上の議論に基づき，以下のような仮説を設定することが可能であろう．

仮説 1 ：賞賛獲得欲求と促進焦点は正の関連を示す
仮説 2 ：拒否回避欲求と抑制焦点は正の関連を示す

制御焦点と発達的要因

さて Higgins & Silberman（1998）は，この促進焦点と抑制焦点に発達的要因，とりわけ両親の養育態度が密接に関わっているとしている．すべての子どもにとって，生存のために養育（nurturance）と安全（safety）が必要であるとの考えから，養育に志向した親の態度は子どもに促進焦点を植え付け，安全に志向した親の態度は子どもに抑制焦点を植え付けるとしている．Higgins（1997）によれば，養育は別の言葉では希望，願望といった強い理想 (strong ideals) を意味する．「これがあなたにしてほしいことだ」「これはあなたにしてほしいことではない」といった態度で子どもに接することが，促進焦点を植え付けることにつながる．また安全は別の言葉では本分，責任，義理といった強い義務（strong oughts）を意味する．「これがあなたがすべきことだ」「これはあなたがすべきことではない」といった態度で子どもに接することが，抑制焦点を植え付けることにつながる．

このように，親の子どもへの接し方が特性としての制御焦点の重要な先行要因となることが予想される．そして親が子どもに与える影響として，われわれが注目するのが社会的勢力（social power）である．それはこの概念が実に幅広い分野で実証的に研究され，数多くの知見が蓄積されているからである．以下では，社会的勢力についてどのような領域でどのような研究が展開してきているのか，概観することとしたい．

社会的勢力研究

われわれは他者からさまざまな影響を受けて生活している．職場では上司，同僚，あるいは顧客などから影響を受ける．学校では教師，仲間などから，家庭では，子どもの立場では親や兄弟姉妹，大人になれば配偶者，ときには子どもから影響を受けることもあるだろう．これらの影響については, それぞれ社会心理学，産業・組織心理学，教育心理学，発達心理学，家族心理学といった領域で盛んに研究されている．各領域で限定的に用いられる概念もあるが，これら諸領域で共通して用いられる概念が社会的勢力である．

社会的勢力とは，「ほかの人の行動，考え，感情などを自分の望むように変えることのできる能力」（今井，1996，p. 56）のことであり，影響者と被影響者との間に存在する多少とも持続的な勢力関係における影響力を示す概念である（French & Raven, 1959）．上司と部下，教師と児童・生徒，親と子など，持続的な勢力関係はさまざまであり，社会的勢力はきわめて広範囲な領域で扱われうる概念であると考えられる．

また，French & Raven（1959）はこの社会的勢力に関して，影響者に対する被影響者側の認知という観点から，報酬を与える能力に基づく報酬勢力（reward power），罰を与える能力に基づく強制勢力（coercive power），被影響者の内在化した規範に基づく正当勢力（legitimate power），被影響者の影響者に対する同一視（identification）に基づく参照（あるいは準拠）勢力（referent power），影響者のもつ専門的知識・経験に基づく専門勢力（expert power）という 5 つの基盤を想定している．

このような社会的勢力について包括的に概観した論

文として今井（1993）があるが，ここではその後の研究も含め，職場，学校，家庭の 3 つの場面における，わが国の社会的勢力研究を紹介し，さまざまな場面で検討されている概念であることを確認する. その上で，とりわけ家庭における社会的勢力研究の展開の可能性について論じることとする．なお，各社会的勢力の名称については，研究者によって多少異なる場合があるが, それぞれの研究者の使用した名称のまま紹介する.

職場における社会的勢力：松原（1988）は社会的勢力を，リーダーシップとモラールの関係をモデレートする変数として位置づけた研究を行っている．地方公共団体職員を対象にした調査の結果，課題達成的リーダーシップ行動と部下のモラールの関係が，部下の知覚したリーダーの準拠勢力によってモデレートされていることが明らかとなった．つまり，課題達成的リーダーシップ行動と部下のモラールは，準拠勢力が高い場合により強く結びついていたのである. この結果は，課題達成的リーダーシップ行動を有効なものにする上で，部下の上司に対する同一視といった要因が重要な前提となることを示している.

その後，松原（1991）はリーダーシップと社会的勢力の直接的関係について地方公共団体職員，私立病院の看護師，鉄鋼関連メーカーの作業員を対象に調査を行っている. その結果, リーダーシップとパーソナル・パワー（専門家勢力，準拠勢力）の関係が，リーダーの地位勢力（報酬勢力，強制勢力，正当性勢力）や部下の成長欲求，部下の年齢という状況変数によってモデレートされていることが示唆された．たとえば，リーダーシップのM行動とパーソナル・パワーとの関係に及ぼす地位勢力のモデレータ効果については，地方公共団体と病院の 2 つの組織で確認され，地位勢力が高い場合にM行動とパーソナル・パワーの関係がより強く結びつくことが明らかになった.

また島倉（2002）は，上司のリーダーシップや社会的勢力が部下の上方向への影響戦略の行使に与える影響について検討している．島倉（2002）では，上方向への影響戦略を「部下が上司に対して用いる『意図的な影響手段』」(p. 221）と定義し，配慮性，相談性，合理性，迎合性，演技性，圧力性，感情性，攻撃性の 8 つで把握している．この研究では，金融業，製造業，流通業の従業員を対象とした調査を行った．これら 8 つの影響戦略を目的変数，上司のリーダーシップ，社会的勢力を説明変数とした重回帰分析の結果, 演技性，感情性は，他の上方向への影響戦略と比べて上司の社会的勢力との関連が弱いことが示された.

このように，職場における上司—部下関係を論じる上で，社会的勢力は重要な変数として位置づけられている.

学校における社会的勢力：伊藤（1994）は, 中学校，高等学校の運動部員を対象に社会的勢力を扱っている．とりわけ，部員の達成動機の高さによって，コーチの社会的勢力と被影響の認知，コーチへの満足度との関係がどのように影響を受けるのかについて検討している．中高のバレーボール部員を対象にした調査の結果, 達成動機が高い場合, 参照勢力と被影響の認知, 参照勢力とコーチへの満足感の間に正の関連がみられた．一方で達成動機が低い場合，指導意欲勢力と被影響の認知の間に正の，罰勢力とコーチへの満足度との間に負の関連がみいだされた．つまり，達成動機の高低によって，いかなる勢力に敏感であるかが異なり，また，達成動機が低い場合，罰をちらつかせて影響力を行使することは，満足感を低下させることにつながることがわかる.

教師の勢力については, 浜名・天根・木山(1983)が, 児童による認知と教師自身による認知の両方に焦点を当てた研究を行っている．小学生教師と小学校 4 〜 6 年生を対象に調査を実施したところ，教師自らが認知している勢力は罰，外面性，人間的配慮，正当性の 4 因子であった．一方，児童が認知している教師の勢力は人間的配慮，外面性，罰の 3 因子であり，児童が教師の正当性を勢力資源として明確には認知していない可能性が示唆された．また，学年別に勢力認知の特徴について分析したところ，学年の進行とともに罰，外面性が低下し, 人間的配慮が上昇することがわかった.

田崎（1979）は，教師の社会的勢力の基盤（田崎は「勢力源泉」と表現している）を検討するため，教師の勢力を測定する尺度を作成した後，小学生，中学生，高校生を対象に調査を行っている．因子分析の結果，親近・受容，外見の良さ，正当性，明朗性の魅力，罰，熟練性，同一化の 7 因子が抽出された．そして，発達段階が上がるとともに勢力認知が低下すること，男子よりも女子の方が勢力を高く認知していることがみいだされた.

また，田崎（2005）では小学生を対象に児童同士の勢力行使場面を取り扱っている．漫画完成法を用いて学校生活の中の 4 場面を設定し，児童が他の子どもに勢力を行使した際に勢力を受ける側の児童が勢力をどう感じ, どう受容するかについて調査した．その結果，給食や掃除といった教師の指導が入る可能性のある場面では，教師を背景とした情報勢力や強制勢力の受容

度が高く，ボール遊びやゲームといった教師の介入がない場面では報酬勢力や参照勢力の受容度が高かった．さらに，男子よりも女子の方が勢力を受容しやすいという性差もみられた．この結果は田崎（1979）とも一致している．勢力行使に対する感情については，専門勢力や報酬勢力を行使された場合は不快を感じる度合いが少ないのに対して，正当勢力や強制勢力は大きな不快感を与えることが示された．また，男子より女子の方が不快感を生じやすいことも明らかとなった．

その他にも，小学生を対象に教師の勢力とリーダーシップとの関連について調査した田崎（1981）や，教師の社会的勢力と学級文化の関連性について検討した西本（1998），教師の社会的勢力に関する研究のレビューとして鎌田・淵上（2009）がある．

以上のことから，学校場面における教師―生徒・児童の関係を論じる上でも，社会的勢力は重要な概念として位置づけられていることがわかる．

家庭における社会的勢力：ここまでは，職場，学校という組織における社会的勢力研究について概観したが, 家庭においてもこの概念は研究が蓄積されている．勢力関係を親子に限定した今井（1986）の研究では，French & Raven（1959）の提唱した社会的勢力の従来の 5 分類に，影響者のもつ魅力や影響者との対人関係を維持していきたい欲求に基づく魅力勢力（attraction power）を加えたうえで，社会的勢力基盤測定尺度を作成し，大学生を対象に調査を行っている．因子分析の結果，参照―専門勢力，賞―罰勢力，魅力勢力の 3 因子が抽出された．また，勢力認知と影響受容の関連を検討したところ，参照―専門勢力と魅力勢力において影響受容との関連がみられた．つまり，両親からの賞罰によって影響を受容するか決定するのではなく，両親に知識・経験があるか, 両親のようになりたいか, 両親に好意的感情をもっているかという観点から影響の受容・拒否を決定していることが示唆された．

今井（1986）では，作成した尺度に関して回答者の性別や父母の違いによる因子構造の差異はないとしているが，それに対して諸井（2005）は父母によって因子構造が変わるという予測を立て，再検討を行っている．女子大学生を対象とした調査の結果，因子構造に違いがみられ，父親では参照・専門，魅力・正当，賞・罰の 3 因子が，母親では参照・専門，正当，賞・罰の 3 因子が抽出された．このことから女子青年は，同性である母親の正当性は母親自体の魅力に関わらず認知するが，父親に対しては父親自体に魅力を感じるか否かが関連して正当性を認知する可能性があることが示された．さらに，父母 6 因子の因子得点で主成分分析を行ったところ，参照，専門，正当勢力は父母別個のものとして機能しているのに対し，賞・罰勢力については父母の勢力を一体のものとして認知している可能性が示唆された．

また野口・若島（2007）は，両親への社会的勢力認知や両親の仲の認知が親子間のコミュニケーションに与える影響について検討している．大学生を対象にした調査の結果, 両親の参照―専門勢力を強く認知する，あるいは両親の仲を良いと認知するほど親子間の率直なコミュニケーションが高まることがわかった．対して，両親の賞―罰勢力を強く認知する，あるいは両親の仲を悪いと認知するほど親子間の拒否的なコミュニケーションが高まることが明らかになった．

さらに野口（2009）は，子どもから見た父母の結びつきに着目し，子どもが認知する両親の社会的勢力，家庭内ストレス，家族満足度との関連について研究している．中学生，高校生，大学生を対象に行われた調査の結果，父母の結びつきが強いと感じている子どもは両親の参照―専門勢力，魅力勢力，正当勢力，家族満足度が高く，賞―罰勢力，家庭内ストレスは低かった．また，大学生よりも中高生の方が両親の賞―罰勢力を強く認知する傾向がみられた．

このように，親―子の関係においても社会的勢力は重要な要因である．多くの人にとって家庭が最初の準拠集団であることを考えれば，個人のもつさまざまな特性の形成において，家庭が大きな役割を果たしていることは想像に難くない．その一側面を切り取る変数として，親の社会的勢力は有用である．

ここまで，わが国における社会的勢力研究を概観してきた．そこで明らかとなったように，社会的勢力は実にさまざまな場面で取り上げられ検討されている．それは，会社，学校といった組織のみならず，家庭における親―子関係においても当てはまる．したがって，子どもに対する両親からの影響について検討する際の一つの指標として有力な概念であることは疑いない．これは，本論文が注目する，制御焦点と発達的要因との関連について検討する際にも該当するであろう．

制御焦点と社会的勢力

両親の子どもに対する態度が制御焦点に影響を及ぼし, その制御焦点が承認欲求と密接に関わるとすれば，両親の子どもに対する態度は子どもの承認欲求にも影響を及ぼすことが予想される．このような予想を裏付

ける研究として三ツ村・高木(2011)がある．三ツ村・高木（2011）は両親の子どもに対する態度として社会的勢力をとり上げ，大学生の認知した両親からの社会的勢力が，大学生の承認欲求と密接に関わっていることを明らかにしている．とりわけ父親からの社会的勢力が賞賛獲得欲求と，母親からの社会的勢力が拒否回避欲求と関わっていた．この結果については，河合（1980）の母性原理―父性原理といった両親の役割などの点から解釈がされている．

以上の結果を制御焦点研究に当てはめるならば，両親に対する社会的勢力認知が，促進焦点，抑制焦点と関わるとの予想を導くことができるだろう．

仮説３：両親に対する社会的勢力認知は制御焦点と関わる

さらに，仮説１，２および三ツ村・高木（2011）の知見に基づくならば，父親からの社会的勢力認知が促進焦点と，母親からの社会的勢力認知が抑制焦点と関連するとの予測が成り立つ．

仮説４：父親に対する社会的勢力認知は促進焦点と関わる

仮説５：母親に対する社会的勢力認知は抑制焦点と関わる

終わりに

ここまで，承認欲求と制御焦点，制御焦点と社会的勢力の関連について５つの仮説を提示した．今後はこれらについて実証的に検証することが求められる．それによって，これら３つの概念，とりわけ承認欲求と制御焦点，及び両者の関連についてのより深い理解が可能になるものと期待される．

引用文献

French, J. R. P., Jr. & Raven, B. H. (1959). The bases of social power. In D. Cartwright (Ed.), *Studies in social power*. MI: Institute for Social Research. Pp. 150–167.

浜名外喜男・天根哲治・木山博文　(1983)．教師の勢力資源とその影響度に関する教師と児童の認知　教育心理学研究，31，220–228.

Higgins, E. T. (1997). Beyond pleasure and pain. *American Psychologist*, 52, 1280–1300.

Higgins, E. T. & Silberman, I. (1998). Development of regulatory focus: Promotion and prevention as ways of living. In J. Heckhausen & C. S. Dweck (Eds.), *Motivation and self-regulation across the life span*. New York: Cambridge University Press. Pp. 78–113.

今井芳昭（1986）．親子関係における社会的勢力の基盤　社会心理学研究，1，35–41.

今井芳昭（1993）．社会的勢力に関連する研究の流れ：尺度化，影響手段，勢力動機，勢力変性効果，そして，社会的影響行動モデル　流通経済大学社会学部論叢，3，39–66.

今井芳昭（1996）．影響力を解剖する ―依頼と説得の心理学―　福村出版

伊藤豊彦（1994）．コーチの社会的勢力の効果に及ぼす選手の個人特性の影響　体育學研究，39，276–286.

鎌田雅史・淵上克義（2009）．教師の影響力に関する理論的研究Ⅰ ―影響プロセスと社会的勢力の観点からの考察―　岡山大学大学院教育学研究科研究集録，141，135–142.

河合隼雄（1980）．家族関係を考える　講談社

Lockwood, P., Jordan, C. H., & Kunda, Z. (2002). Motivation by positive or negative role models: regulatory focus determines who will best inspire us. *Journal of Personality and Social Psychology*, 83, 854–864.

松原敏浩（1988）．リーダーシップとモラールの関係に及ぼすリーダーのもつ社会的勢力の影響について　経営行動科学，3，1–11.

松原敏浩（1991）．リーダー行動とパーソナル・パワーとの関係に及ぼす状況変数の効果について　経営行動科学，6，25–33.

三ツ村美沙子・高木浩人（2011）．親への社会的勢力認知と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連　愛知学院大学論叢心身科学部紀要，7，23–31.

西本裕輝（1998）．教師の資源と学級文化の関連性　社会心理学研究，13，191–202.

野口修司（2009）．青年期の子ども視点における家族構造と社会的勢力に関する研究　家族心理学研究，23，91–109.

野口修司・若島孔文（2007）．青年期の親子関係における社会的勢力とコミュニケーションに関する研究　家族心理学研究，21，95–105.

尾崎由佳・唐沢かおり（2011）．自己に対する評価と接近回避志向の関連性 ―制御焦点理論に基づく検討―　心理学研究，82，450–458.

Shah, J., Higgins, E. T., & Friedman, R. (1998). Performance incentives and means: How regulatory focus influences goal attainment. *Journal of Personality and Social Psychology*, 74, 285–293.

島倉大輔（2002）．上司のリーダーシップや社会的勢力が部下の上方向への影響戦略の行使に与える影響　経営行動科学，15，221–229.

田崎敏昭(1979)．児童・生徒による教師の勢力源泉の認知　実験社会心理学研究，18，129–138.

田崎敏昭（1981）．教師のリーダーシップ行動類型と勢力

の源泉　実験社会心理学研究，20，137–145.
田崎敏昭（2005）．児童における社会的勢力の受容に関する研究　福岡女学院大学紀要．人間関係学部編，6, 29–37.

最終版平成24年 1 月11日

Journal of the Institute for Psychological and Physical Science, Vol. 4, No. 1, 49−55, 2011

The relationships of approval needs, regulatory focus and social power of parents
—Presentation of hypotheses—

Misako MITSUMURA, Hiroto TAKAGI

Abstract

In this review, we proposed five hypotheses about the relationships of praise seeking needs, rejection avoidance needs, regulatory focus and social power of parents. The five hypotheses are as follows: H1: praise seeking needs will be positively correlated to promotion focus, H2: rejection avoidance needs will be positively correlated to prevention focus, H3: perceived social power from parents will be correlated to regulatory focus, H4: perceived social power from father will be positively correlated to promotion focus, H5: perceived social power from mother will be positively correlated to prevention focus. Implications for future empirical research were discussed.

Keywords: praise seeking needs, rejection avoidance needs, promotion focus, prevention focus, social power